

## 「エケケイリア」、常備軍軽視論（ヤーン）、そして「世界平和宣言」

### “Ekecheiria” and “World Peace Declaration”

山本 徳郎

Tokuro YAMAMOTO

キーワード：軍隊非存在時代、常備軍、21世紀型スポーツ

#### はじめに

2008年7月初めにISHPES（国際体育スポーツ史学会）のセミナーがエストニアのタルトで行われた。私はそこで“Ekecheiria” and “Article 9 of the Japanese Constitution”というテーマで発表を試みた。本稿はそれに若干修正を加えたものである。

タルト・セミナーのテーマは“People in sport history - sport history for people”であった。これを見て私の脳裏にすぐ浮かんだのは第16代アメリカ大統領リンカーンの言葉であった。そもそもスポーツは人民（人間）にその起源を有しているので、スポーツは常に人民による、人民のための営みであるはずだ。しかし、近・現代の体育やスポーツは、常に軍隊のある社会に生まれ、ナショナリズム、コロニアリズム、ミリタリズムに支えられ、「若々しい喜びに包まれて（みせかけて）」<sup>1)</sup> 人民を駆り立ててきた。体育やスポーツは、本来の「遊び心」を失い、むしろ人民を疎外するものに墮落していた<sup>2)</sup>。

本研究は、その事実をふまえ、人民の、人民に

よる、人民のためのスポーツを可能にする平和社会追求の道筋を、「エケケイリア」を端緒にカントの常備軍廃止論、ヤーンの常備軍軽視論を経て「世界平和宣言」へと大雑把にたどってみた。ここで言う「世界平和宣言」とは「日本国憲法」のことである。第二次世界大戦後、国連は「世界人権宣言」をおこなったのに「世界平和宣言」を出さなかったと言う小田実<sup>3)</sup>は、本来国連が出すべきその宣言を一国の憲法という形で出したのが「日本国憲法」だと言っていることにあやかってみた。平和こそが「21世紀型スポーツ」を存立させる原点だからだ。

#### エケケイリア

近代オリンピックは、始まってからまだ100年少々を経過したに過ぎない。それなのに「戦争」のために、すでに3回中止されている。中止されないまでも地域的な戦争に常に脅かされ、開催があやぶまれることも後を絶たない。これに対して、古代オリンピックは、周知のように1200年近くもほとんど4年ごとに一回も欠けることなく続け

られた。古代オリンピックを行ったギリシャ民族はポリスという多数の小国家に分かれ、互いに対立・抗争していた。それにもかかわらずオリンピックでの祭典を定期的開催することを可能にした一つの要因は、「エケケイリア」と呼ばれる制度が存在したからだと言われる。

「エケケイリア」とは、オリンピックの祭典にさきがけ、人々がギリシャ全土からオリンピックに集まれるように、そして祭典終了後、再びそれぞれの郷里に帰りつくように、たとえ戦争していても、その間は休戦して道中の安全を保障するという制度のことで、「オリンピックの休戦」と言われている。ホイジンガによると、BC. 7世紀頃の戦争は、前もって戦闘の規定を記した契約書を神に寄託し、まったく競技形式で行われていたという<sup>4)</sup>。このことから、当時の戦争の規模がこの制度の存続を可能にしたとも言える。しかしそれ以上に、エケケイリアを可能にするのに大きな役割を果たしたのは、オリンピックの祭典がギリシャ民族の宗教行事（政治的行事）だったということであろう。このことは古代オリンピックの終焉が、競技の腐敗や衰退によって迎えられたのではなく、キリスト教による弾圧によって、つまり宗教的弾圧によっていたことを考えれば理解できよう。

したがって、「エケケイリア」を過大評価してはならないが、しかし「エケケイリア」という制度は人間の知恵であり、文化であったことを、我々は忘れてもならない。なお、この用語は紀元前4、5世紀ごろから出現しているようであるが、十分な検証はなされていないようである。

### 近代体育スポーツ誕生期と常備軍論（平和論）

18世紀末から19世紀にかけて、ヨーロッパに近代的な体育やスポーツが誕生した。特にドイツではゲーツムーツのギムナスティックとヤーンのトゥルネンがはじめられ、以後の身体教育に大きな役割を果たした。イギリスはパブリックスクールを中心に近代スポーツを育み、近代スポーツは

更にフランスのクーベルタンが提唱したオリンピック運動の波に乗じて世界的になった。しかし当時のヨーロッパは決して平和に彩られていたのではなかった。

カントは晩年に『永遠平和のために』（1795）を出版した。その中で彼は「国民が期間を定め、自発的に武器をもって訓練し、みずから、また祖国を他国からの攻撃にそなえること」を認めながらも、「常備軍はいずれ、いっさい廃止されるべきである」と主張していた<sup>5)</sup>。その十数年後の1807年から1808年にかけて、フィヒテはナポレオン軍占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」という連続講演を行った。その中で彼は、国家収入の大部分をその維持費にあてねばならない常備軍が、何ら結果も出せない存在だったことを批判しながら、「国家が私たちの唱道する国民教育を普く施行すれば、發育盛りの次代青少年が国民教育を終了するや否や、国家は何ら特別の軍隊を必要としなくなるのだ。否、国家はこれらの青少年を成員にしてまだ類例のない美事な軍隊を保有するに到であろう」<sup>6)</sup>と述べ、軍事費を教育費にまわすことを提案していた。

フィヒテが上記の講演をおこなっていた頃、ヤーンは郷里で『ドイツ民族性』を書き上げ、ベルリン郊外のハーゼンハイデでトゥルネン活動を始める一年前の1810年に出版した。彼は、「侵略戦争は、祖国の為に生死を賭けてする戦いとは全く違ったものである」<sup>7)</sup>と述べ、侵略戦争を強く否定している。そして正しい国防戦争を行う為には常備軍よりも国民軍を重視して「国防戦争の最後の武器は国民軍である」<sup>8)</sup>と主張した。周知のように1811年にハーゼンハイデに集まった若者は、ヤーンの指導の下でトゥルネンをし、祖国愛に目覚めた。1813年に始まる対ナポレオン解放戦争で、彼らは急遽結成された義勇軍（国民軍）に参加し、直ちに戦場へおもむき、そして多くの犠牲者を出す結果となった。ヤーンのトゥルネンも以後は軍隊との関係をからませられながら拡大する一面はあったが、ヤーン自身、あるいは初期トゥルネン

が、好戦的雰囲気であったとは言いがたい。

ヨーロッパが激動の時代を迎え、帝国主義的戦争が盛んになり始めたこの時期に、愛国者と言われるこれらの人びとがそろって常備軍に批判的だったのは何故だろうか。松岡正剛によると、『戦争論』で有名なクラウゼヴィッツは、イエナの戦（1806）で捕虜になったとき、歴史と栄光に輝くドイツの軍隊（常備軍）が、何故「雑兵」でかためたナポレオン軍に敗れたのかということに疑問を抱いたという<sup>9)</sup>。フィヒテやヤーンもプロイセンの敗戦に同じような認識をもち、常備軍への不信を抱き、それに代る国民軍の意義を主張したのではないだろうか。確かに19世紀は国民国家の時代で、各国が軍隊の育成に力を注いでおり、中世的な傭兵による軍隊から国民軍への移行期であった。常備軍への不信が直ちに「平和」論であるとは言いがたいが、今日本でカント平和論が読み直されているのは、今後の軍隊・国防のあり方が問い直されているからだと思う。

## 近代体育やスポーツの地理的拡大

18世紀末にドイツのグーツムーツを中心に始められた近代体育は、国民国家の成立やその後につづいた戦争の世紀を通して、国家の政策に支えられながら今日まで普及してきた。他方近代スポーツは経済的には先進国であったイギリスの大学やパブリックスクールを中心に19世紀に組織され、発展した。パブリックスクールは将来のイギリスを担うエリートを育てる場であった。そこでなされたスポーツ教育に感動したフランスのクーベルタンは、19世紀末に近代オリンピックの開催を実現し、20世紀はスポーツの世紀とまで言わせたほどスポーツを地球規模に拡大させた。

19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパ諸国は、帝国主義的な植民地獲得政策を競い合うように進めた。その具体的な結果をサイドは主著『オリエンタリズム』で、「1815年から1914年までに、ヨーロッパの直接支配下におかれた植民地

領土は地表面積のおよそ35%から85%にまで拡大した」<sup>10)</sup>と述べている。つまりナポレオン以後のヨーロッパを議論したウィーン会議の頃（1815）は、地表面積の35%だったのに、第一次世界大戦がはじまる頃（1914）には85%がヨーロッパの国土乃至植民地になっていたというのである。『オリエンタリズム』に込められたサイドの意図は、この誤りを第二次世界大戦後の、つまり今日のアメリカが繰り返そうとしていることへの警告・怒りを表明することだったが、我々は20世紀に体育やスポーツが世界中にひろまった背景には、このような帝国主義的植民地化が併行して存在していた事実を確認しておかねばならない。それを進めていた国は、近代体育誕生の地ドイツ、近代スポーツ発祥の地イギリス、そして近代オリンピック提唱の国フランスが中心だったのである。

## 近代体育スポーツは人民のものであったか？

啓蒙主義からグローバリズムへという時代における体育やスポーツの拡大・浸透は目を見張るものがあった。しかし、それらの文化は、果たして人々にとって心地よいものであったのだろうか。すでに多くの論者が指摘するように、人間への管理化傾向は強まり、それによって人間は「服従する身体、生産する身体」へと追いやられ、疎外感にさいなまされてきた。人間性豊かな「感覚的事実」<sup>11)</sup>より機械的な「測定的事実」を尊重する雰囲気のなかで、ホルクハイマーとアドルノは『肉体への関心』という草稿を書いていた。そのなかで彼らは、人間を測ることを嫌ったユダヤの故知を引き合いに出しながら、人間は「棺桶作りの目」<sup>12)</sup>にさらされていると論じた。人間を測定し数値化することは、人間を個性豊かな生ある存在としてではなく、死体として物的にしか見ていないというのである。

1938年に『ホモ・ルーデンス』を公にしたホイジンガも、その中で「スポーツの組織化と訓練

が絶えまなく強化されてゆくとともに、長いあいだには純粋な遊びの内容がそこから失われてゆく」と考え、19世紀の最後の四半世紀このかた「スポーツは遊びの領域から去って」<sup>13)</sup> いると主張した。ホイジンガは、スポーツにはもはや文化を創造する力はなく、スポーツの教育可能性も失われたと悲観的にみていたのである。グーツムーツは体育 (Gymnastik) というものは「若々しい喜びにつつまれた課業」<sup>14)</sup> だと言いたかったであろうが、20世紀のこのような状況に接すると、それは「若々しい喜びと見せかけた苦役」と訳し直したくなる。近代の体育やスポーツは、若々しい喜びを装って (見せかけて)、若者たちに苦役を強い、疎外状況に追い込んでいたのではないだろうか。

戦争が激しさを増し、各地で大量虐殺が繰り返される時代でも、体育やスポーツやオリンピックは発展を遂げていたが、一方では自らのスポーツ詩で「おお、スポーツ、おまえは平和」<sup>15)</sup> と謳ったクーベルタンをはじめ、多くのスポーツマンは平和を願っていた。

第二次世界大戦のあと制定された日本国憲法は軍隊を持たない、戦争をしないという非戦の誓いを表明したものであった。それは小田実によると、本来国連が出すべき「世界平和宣言」を、一国が憲法という形で出したものだった<sup>16)</sup>。特にその第9条は、かたや戦争や軍隊と隣り合わせて存在し続けた従来の20世紀型スポーツから、それらを否定しながら築いていこうとする21世紀型スポーツへの転換を可能にする前提であった。

## 「21世紀オリピズム」構築へ

私はかつて「体育・スポーツの歴史と1945年」<sup>17)</sup> という小論を書いた。日本の体育やスポーツの歴史にとって、1945年はいかなる意味をもったか、という問題意識からであった。結論としては戦前から戦後にかけて日本の体育・スポーツ界では担い手の交代が殆ど見られなかったので、根

源的な変化はなかったというものだった。

しかし最近では、軍隊が存在していた戦前と、戦力・戦争を放棄した戦後では大きな違いがあったのではないかと、特に日本の体育・スポーツ界はその影響をどのように感じ取っていたのかが気になっている。戦後「六三制、野球ばかりがうまくなり」という川柳がはやったように、自分の少年時代を振り返ってみても、軍国的体育が遊戯的スポーツ中心に変わったし、集団体操や整列、号令なども行われなくなり、きわめて自由な雰囲気醸し出されていたことは事実であった。スポーツ場面でも国旗の掲揚や国歌の斉唱は遠慮がちにおこなわれ、何となく照れくさいものだった。今考えると軍隊のない社会の体育スポーツ状況としての典型的な時代であった。

しかし時代が進むにつれてその雰囲気は徐々に変化し、軍隊があった時代へと逆行した。朝鮮戦争がはじまり、急遽警察予備隊が組織され、それが自衛隊へ、さらにその強化へ進んだ時代の変化に同調したような変わりようであった。今では軍隊を誇示している諸国と同じ雰囲気ですポーツのイベントが開催されている。世界に先駆けて、日本だけでもこの動向に背を向けられないものだろうか。1964年の東京オリンピックの頃、石原慎太郎はIOC会長ブランデーの「優勝者のための国旗掲揚で国歌吹奏をとりやめよう」という提案に賛成していた<sup>18)</sup>。スポーツの場面から国旗や国歌を排除する試みがなされはじめてもいいのではないかと夢想している。

私は現在、それを実現する方策を模索し、「21世紀オリピズム」(仮称)を構築するための研究を進めている<sup>19)</sup>。「オリピズム」という言葉は、一般の辞書にはなく、クーベルタン自身か、あるいは当時のジャーナリズムかが作り出した言葉のようだ<sup>20)</sup>。「21世紀オリピズム」とは、近代社会の中で「死体」と化してしまった人間に、再び「生」を回復させ得る言葉、営みでなければならないと考える概念である。体育学もスポーツ科学も、本来「人間の学」であったはずだ。しか

し現在体育やスポーツに向けられている眼差しは「棺桶作りの目」ではないだろうか。私の試みは、この「眼差し」を再び人間的なものにしていきたいという願いなのである。

これまでのオリンピックは西欧文明の拡張主義の一形態であり、西欧化の要因として機能してきたことは周知の事実である。「21世紀オリピズム」では、オリピズムという概念を仮に中心に据え、しかもこれまでの西欧中心に捉えられていたことに対して、これを相対化できるオリピック後発国からの視点を重視しながら、体育やスポーツのグローバリゼーションの今後の方向づけも検討している。「21世紀オリピズム」は、単なるオリピック主義ではなく、人間の「遊び」性、「狂気」性、「構想力」といった文化性豊かなエネルギーを育てる可能性を秘めた21世紀の体育やスポーツ等、身体文化、運動文化にかかわるすべての領域を含める総称で、世界平和にも貢献できるものでなければならないと考えている。

## おわりに

近代の教育は、常に個性の尊重、主体性の確立など「個」に関するスローガンを叫んできたが、これはあくまでも「みせかけ」<sup>21)</sup>にすぎず、事実それは裏腹に、人間の画一化、規格化を押し進め、体育やスポーツは常にそのための訓練を担わされてきた。このような閉塞した現状を打破し、人間が再び人間らしく生活できるような方向性を、我々は体育やスポーツという領域を通して探らねばならない。つまりそこでは従来型ではない、新しい「21世紀型スポーツ」の構築が求められねばならない。

IOCでは2000年に国際オリンピック休戦財団や国際オリンピック休戦センターを設立し、積極的に平和への努力を始めた。この動きを評価する国連は、オリンピックの前年に、つまり2年ごとにIOCが提案する「オリンピック休戦」への支持を決議している。アテネ大会が開催された

2004年のオリンピックデー（6月23日）に、日本ではJOAや日本スポーツ学会が中心になって「オリンピック休戦を日本から呼びかけよう」というイベントが行われた。私も趣旨に賛同し、オリンピックの休戦を日本から発信する試みに加わった。

丁度それと同じ頃、ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎氏も加わった9名が、「9条の会」を結成した。「9条」とは世界に先駆けて戦争放棄と戦力を持たないことを規定した日本国憲法第9条のことであるが、「9条の会」の結成は、9条存続が危ぶまれる状況への懸念であり、抵抗であった。この運動は各方面に刺激を与え、現在では地域ごと、職域ごと、そして領域別に沢山の「9条の会」が誕生している。「スポーツ9条の会」も同年12月に発足し活動している。さらに2008年5月には、東京・幕張で「9条世界会議」も開催され、世界中から多くの方々が参加し、9条問題が国際化しはじめている。いうまでもなく、スポーツの発展には平和が不可欠の条件である。今後とも9条を大切に、「21世紀のエケケイリア」を、何とか「休戦」から「反戦」「非戦」にまで高めるよう努力したい。

なお上記の検討を通して、軍隊のある時代と無い時代（軍隊非存在時代：昭和20年代）において、体育やスポーツのあり様は異なるのではないかという問題意識を持つようになった。軍隊非存在時代の開始時に、つまり1945年に、19世紀初めのドイツのような日本の常備軍（日本帝国軍隊）に対する批判は存在したのだろうか。憲法9条成文化を支えたエネルギーは何だったのだろうか。このような疑問への答え探しを今後の課題とした。

## 文献

- 1) 山本徳郎「『みせかけ』型体育からの脱皮を！」『学校体育』2002年3月号
- 2) 例えばT.Yamamoto: Historical examination of sports and globalization: Through the study of

- GutsMuths's "Gymnastik" and Jahn's "Turnen".  
In: International Journal of Eastern Sports & Physical Education. Vol.5 No.1, 2007. 趣旨を日本体育学会第58回大会(2007年)で発表
- 3) 小田実『中流の復興』生活人新書2007, p.18
  - 4) ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫1992, p.204
  - 5) カント、池内紀訳『永遠平和のために』集英社2007, p.56, 57
  - 6) フィヒテ、小野浩訳『ドイツ国民に告ぐ』角川文庫1959, p.192
  - 7) Jahn: Das deutsche Volkstum. 1810. Reclam版 o.J., p.179
  - 8) Jahn: p.181
  - 9) 「松岡正剛の千夜千冊」の第二百七十三夜による。
  - 10) サイド、板垣他訳『オリエンタリズム』平凡社1986, p.41
  - 11) 山本徳郎「グーツムーツの感覚訓練」『奈良女子大大学院研究年報』第4号1988、参照
  - 12) ホルクハイマー、アドルノ、徳永訳『啓蒙の弁証法』岩波書店1990, p.374
  - 13) ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫1992, p.399
  - 14) GutsMuths: Gymnastik für die Jugend. 1793 (1957版), p.160
  - 15) 小石原美保『クーベルタンとモンテルラン』不味堂出版1995, p.60
  - 16) 3)と同じ
  - 17) 山本徳郎「体育・スポーツの歴史と1945年」『体育スポーツ評論1号』1985.所収
  - 18) 真田久「作家たちの東京オリンピック(1964)」『現代スポーツ評論』19号、2008年
  - 19) 山本徳郎「21世紀オリビズム構築のための基礎的研究」科研費成果報告書、2006.
  - 20) 清水重勇「21世紀のオリビズム・・・?クーベルタンに訊く」国土館大学体育研究所報22巻 2003, p.97
  - 21) 1)と同じ

### その他の文献

- \* Andreas Höfer: Der Olympische Friede. Anspruch und Wirklichkeit einer Idee. 1994.
- \* 高橋幸一『スポーツ学のルーツ—古代ギリシャ・ローマのスポーツ思想』明和出版、2003年
- \* 前田朗『軍隊のない国家—27の国々と人びと』日本評論社、2008年4月
- \* 澤地久枝『希望と勇気、この一つのもの—私のたどった戦後』岩波ブックレット、No.725、2008年6月
- \* むのたけじ(武野武治)(聞き手 黒岩比佐子)『戦争絶滅へ、人間復活へ—93歳・ジャーナリストの発言』岩波新書、2008年7月